

災害対応の記録

日建連東北会員企業・社員たちの闘い

銭高組東北支店
管理部庶務課

富田 順子



銭高組社員と協力会社の社員による、東日本大震災の災害ボランティア活動を行いました。

仙台市宮城野区で4回（5月6日15人、同13日13人、同26日20人、6月3日17人）、岩手県上閉伊郡大槌町で1回（5月20日14人）活動し、当社従業員延べ40人（うち女性8人）、協力会社の社員延べ39人（うち女性1人）の合計79人が一般家屋の敷地内のがれきや泥などの除去作業を行いました。

仙台市宮城野区のボランティアセンターとなっている体育館には、全国から多くのボランティアの皆さんが集まり、復興に向けた献身的な姿を見ると清々しい気持ちになりました。しかし、隣接の体育館には被災者の方が居住されており、窓辺に干された洗濯物が目に入った時、改めて大変な状況であることを痛感しました。

5月6日朝、スコップや一輪車を持参してセンターから宮城野区蒲生を通り、岡田地区で被災された依頼者宅へ向かいました。想像を絶する津波の被害は甚大で、存在していたはずの建物は見当たらず一帯は別世界と化し、痛切な思いが込み上げて

行動を起こすことが力になる



スコップや一輪車を持参してボランティア活動

波警報を知りそのまま避難されたそうです。万が一、自分の子どもが津波に遭遇していたらと考えただけで涙があふれてきました。

奥さまは、私がマスクなどを外して会話を始めた際、女性が作業していたことを知り感激されていました。自宅が全壊という大変な状況の中、自ら避難所で手伝いをされ、明るく豊かで温かい人間性を持ち続けられていることに感

動し、私の方が励まされました。

現場では敷地の広範囲にわたり、がれきなどの除去作業に取り組みました。庭のあらゆる所には、松林の松葉が土砂に混ざり幾重にも折り重なり、ほかにも雨樋や電化製品など、本来庭にあるはずのない物が目の前に散在し、それは津波がものすごい勢いですべてを押し流したことを示していました。

写真や生活用品、サッカーボールや洋服などが砂に入り混じり、それらを手に取るたびに持ち主の想いを感じ、「元に戻せたら」という一心で、汗だくになりながら無我夢中で作業を続けました。

庭の片隅に新しく祠（ほくら）が祭られていましたが、そこに再出発の希望を感じ、周囲の木々に絡まったがれきを、復興の願いを込めて懸命に取り除きました。

依頼者の奥さまの話では、震災直後、お孫さんを学校まで迎えに行き、そこで大津

動し、私の方が励まされました。

作業を終え、別れ際にその方が涙を流され、ご主人と一緒に参加者一同に大変感謝されていたことが心に残っています。参加者全員が「困っている誰かに喜ばれる」行動を起こすことが「力」となることを実感しました。日常生活においてもその精神を大切に、普通の生活ができることに感謝して過ごしたいと思います。

すぐ近くで起きた大津波により多くの方が大変な思いをされていますが、一步場所が違うだけで自分は救われている。震災以降、ほとんどの方が心のどこかで思っていた、「何かをしなければ」という一人ひとりの思いが大きな力になると信じています。

早期に活動していればもっとがれきや泥を除去することが出来たと思うと同時に、今後も復興を願い、さまざまな形でボランティア活動に参加したいと思います。